



TITLE:

## 地理教材としての地形圖(第二輯): 二、根室[半]島の地形

AUTHOR(S):

本間

---

CITATION:

本間. 地理教材としての地形圖(第二輯): 二、根室[半]島の地形. 地球  
1930, 13(5): 383-386

ISSUE DATE:

1930-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183753>

RIGHT:

# 地理教材としての地形圖 (第二輯)

## 二、根室半島の地形

所要 地圖

五萬分一地形圖 根室南部

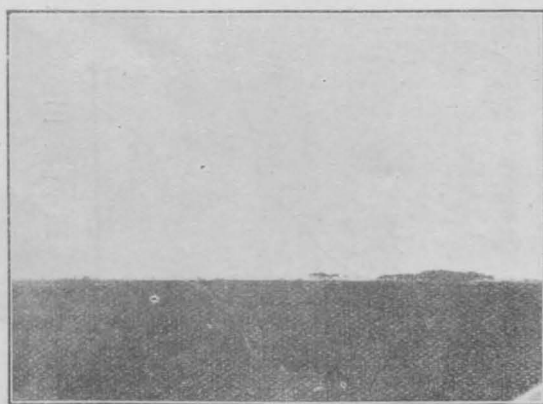
根室半島は一望遮るものなき臺地である。

上部白堊紀なるセノニアン紀下部の水成岩が北東東に走行を有し北北西に數十度傾き、此の中には幾層ともなく方沸石ドレライトの岩席が入つて居る。之が根室半島の基盤をなす岩層であるが、無線電信局の在る落石には礫岩より成る第三紀層が僅に存在すると信じられてゐる。

此の基盤岩層が最近まで海底にあつたことは此の上につてゐる薄い若い堆積層で知られる即ち其處では圓い海水に洗はれた礫や浮氷が海岸の斷崖に突き當つた時に崩した角礫などの堆積層が先づ最下底に見出され、其の上に火山噴出物や泥土や泥炭の重る陸成層が来る。然も此の全體の厚さは根室町南方の鐵道の切割りで目

撃する處では三米に達することがないから全く貧弱なものである。従つて根室半島の茫漠たる

第一圖



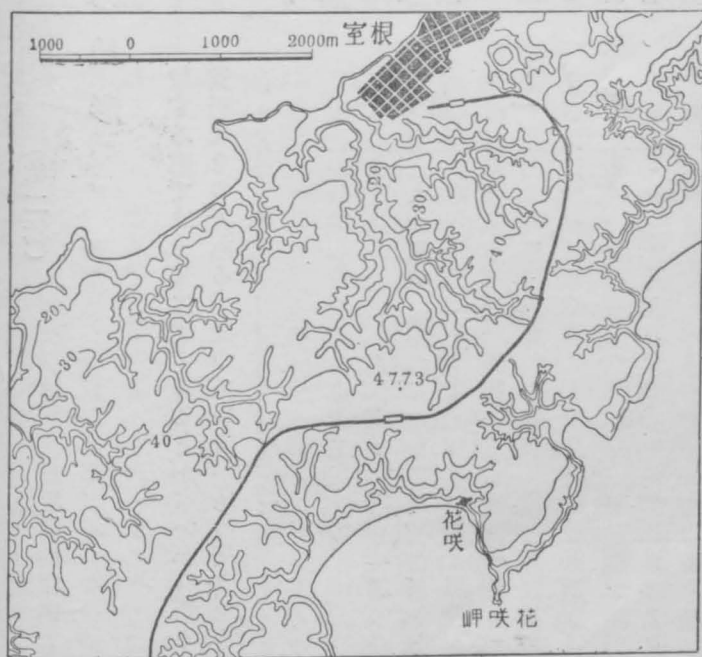
第二圖



平坦面は  
基盤岩層  
の平坦な  
ことに基  
因し、其  
の後に堆  
積したもの  
の地形  
に支配さ  
れてゐる  
のではな

い。故に此の地方は又た最近まで廣い海底平  
地をなしてゐたのであつたことが知られる。  
根室半島の南から北に緩斜する今日見る五  
十米の海拔高度が果して斷層を境として隆起  
したために起つたのか地盤の撓曲の結果起つ  
たのかは目下判斷しかねる。之は海底地形が  
都合よい形態を示めせば比較的容易に解かれ  
るが、然らざれば之より西部なる内地の火山

第三圖



灰に被はるる地域の地質調査で其の北邊を確めるより外なく、それにしても根室半島の南海岸成立の由來を直接確めることは困難である。唯根室半島が北東に延びた矩形をなすこと、波浪の甚しくない根室灣側の直線狀海岸をなすこと等は地塊運動の存在を暗示すると見てよく、釧路から根室半島東端までの太平洋海岸の東西と北東東、南西西の結び付いた海岸線の大勢と共に地壘となつて海底から隆起した半島と想像しておくのが妥當であらう。

根室半島が此の如く隆起してから、流水による浸蝕の起つたことは勿論で、其の爲め極く若年期の谷が此處に生じて居る。此の谷が出来始めてから北海道に火山噴火の盛んに行はれたことは基盤と其の平坦面上に水平に堆積した地層とを切つて生じた谷の形に平行して火山噴出物が盛んに堆積してゐることで知れる。又同時に此の事實は基盤上の新堆積が殆ど海水面に近い高さで行はれ、それから突然根室半島が今日の高さに隆起した事を物語るものであるから甚

だ重要である。

平坦面上に生じた谷の位置は基盤の地質構造に支配され、基盤地質の脆弱な處が谷となつてゐる。即ち頁岩帯と斷層帯がそれであつて、之は根室に數十年間生活し、此の地方の歴史、地理、地質を研究してゐる伊藤初太郎君の最も興味を以つて觀察してゐた現象の一つであつた。半島附近に散在する數多の小島の元一大島なりしものの分離した境界も亦た之である。

又た先にも一寸述べたが嚴寒の冬が過ぎて春が蘇ると海面に張りつめた氷が解けて浮流し始め海岸の絶壁に衝突して崖を崩壊し行く狀況が隨所に見られる。此の衝撃による崩壊作用は可成り著しく、海岸蝕磨の一營力として甚だ重要視されなければならぬことを伊藤君から教へられた。此の氷板は氷山の様に根の深いものではないから淺海を漂流して自由に海岸に迫るものであることは特に注意すべく、同時に餘り遠方に浮動せず、衝突によつて崩れ込んで來た岩塊も其の表面にのつて僅に數軒又は數十軒の外に

運ばれるに過ぎないことを注意しなければならぬ。

根室半島に見る此の海成准平原は釧路から以

東一圓に展べられた大地形で、此の種のものであろう。(本間)

## 伊太利ところぐ (六)

瀧川 規一

〔纏頭の心理〕 伊太利に入つて纏頭に再び頭

を腦した。最初この問題で頭を腦した時は故國を發して乗船した時である。故國內の旅行には常にこの纏頭若しくは祝儀が頭痛の一になる。

旅馴れた者にとつても時には纏頭の多少によつて用事さへ便ぜぬことがある。交通瀕繁なる歐米諸外國が果して如何なる習慣をもつてゐるかは旅客にとつて常に頭を腦ます處であり且つ興味ある交通界の一問題である。旅馴れた人々は纏頭のことなどは話題にするのも耻かしいと云はんばかりの顔をしてゐる。懷を黄色の鑛物で

腐らす人々は亦一笑に附し去る傾向がある。然し纏頭を貰ふ側から云ふならば纏頭も一種の財源である。輕々に看過することが出来ない。纏頭の少きが故に顔色を異にし剩へ客に不愉快を感ぜしめる程になることがある。特別賞與金の減額すら罷業を惹起する世の中である。纏頭の少きが故に所要を便ぜぬこと位は當然過ぎぬ程當然であると思へばそれまでであるが、スピードの時代にあつても、纏頭の多少によつて與へる者にも與へられる者にも可成の氣遣ひがあるとするれば、相當の改良の餘地が無いでもない